
偽書 ロックマンゼロ

スケイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽書 ロックマンゼロ

【Nコード】

N85160

【作者名】

スケイス

【あらすじ】

人間に極めて近いロボット レプリロイド。

それらを凶悪化するウィルスを発端とする「イレギュラー戦争」は英雄の活躍により終結し、世界に平和が訪れた。そして、人々が幸福に暮らす事の出来る理想郷ユートピアが作られた。

その名は、「ネオ・アルカディア」。

だが、そこは真の理想郷では無かった……

序章 prologue

男は眠りに就こうとしていた。

永い永い、いつ醒めるとも知れぬ眠りに。

「どうしても、なのか？」

男の背中に向けて、絞り出したかの様な声が掛けられた。

その声の主は、男の親友だった。幾多の死線を共に潜り抜けてきた掛け替えの無い……

「今の技術なら、『あのウィルス』に対する有効なワクチンだってきつと作り出せる。それに君の身体だって」

そこまで言って、親友は続く言葉を飲み込んだ。眼前の男の背中越しに見えたその横顔、その瞳が意志の輝きに満ちていたから。

「……一つ、頼まれてくれないか？」

「え？」

そう言って、男は振り返り、親友に『あるモノ』を差し出した。

「これは……」

親友は、男が差し出したモノが何であるかをよく知っていた。ソレは男が己が命を乗せ、誇りを貫き通す為に必要なモノだ。

「コイツを預かっていてくれないか？」

男の紡いだその言葉を、親友は理解出来なかった。自分の知る限り、自分から殆ど手放す事の無かったソレを、他人に預けるなんて

……

解り易い位、動揺している親友に苦笑しつつ、男は続けた。

「……少しの間だけだ」

その言葉を聞いた親友は、ほっ、としたと様に溜め息を吐いた。

そんな親友の姿を眺めつつ、男は笑う。

コイツは、本当に変わらない。多くの戦いの末、バ―ジョンアップを繰り返し、幾分か外見が変化した親友だが、精神^{ココロ}だけは、本当

に変わっていない。尤も、それは自分にも言える事かも知れないが。
「 解った。君が戻るまで、コレは俺が預かっておく」

自分が差し出したソレが親友が手に渡ったのを見届けた男は、満足そうに頷くと、背を向け、開け放たれた大扉の向こう側へと足を踏み入れた。やがて彼が完全に向こう側へと入った瞬間、大扉が世界を二つに分かつかの如く、ゆっくりと閉まっていく。

そして、大扉が閉まり切る瞬間、僅かな隙間から男は親友に向けて最後の言葉を贈った。

「また、会おう…… エックス」

親友もそれに応えた。

「ああ……ゼロ！」

男は眠りに就いた。

いつ醒めるとも知れぬ永い眠りに……

偽書 ロックマンゼロ

第一部 ネオ・アルカディア

.

英雄再誕 re-birth

鬱蒼と繁る原生林の奥深く、古の時代の面影を色濃く残す場所。その中心に位置するかつて研究所だったであろう遺跡に、彼等は訪れていた。

深緑色の装束に身を包んだ姿は、軍人にも見えなくは無いが、その割には拳動の一つ一つに統率性が見られなかった。

そんな集団の中に一人だけ、鮮紅色の衣服に身を包んだ少女が居た。

「ここが……」

少女は、神妙な面持ちで、眼前に聳える建造物を見上げていた。

既に放棄されて久しいその場所は、周囲の木々と同化して在りし日の姿を失いかけおり、人々の記憶からも忘れ去られようとしていた。そんな場所を好んで訪れる者など、精々好事家^{すきもの}くらいだろう。

だが、彼女　否、彼女達は自分からこの深緑の遺跡を訪れていた。

「シエル」

背後から声をかけられ、少女は蜂蜜色の金髪^{ハニーブロード}を靡かせて振り返った。

「爆弾の設置は終わった。いつでもいける」

駆け寄ってきた緑装束の男が遺跡の入り口付近を指し示しながら、少女　シエルに報告した。

それを受けたシエルは、複雑な表情を浮かべながら緑装束に問うた。

「ねえ、ミラン……私たちのやろうとしてる事って、本当に正しいのかしら……？」

「え？」

シエルは、苔むした外壁に手を当てた。自らの体温が、この向こう側に眠る得たいの知れない何かを感じ取っているのだ。

「ココは、私たちが足を踏み入れて良い場所じゃない……そんな気がするのよ」

「そんな！？ だったら、俺達はどうやって生きていけば良いんだ！」

「それは……」

鬼気迫る形相で食って掛かるミランに、シエルは何も言う事が出来なかった。

「もう俺達にはこれしか方法が無いんだ！ シエルだって解ってるだろう？」

そうだ。彼らにはもう後が無いのだ。このまま黙って死ぬ位なら、生き残る為に禁忌をその手に。

そんな手段を講じなければならぬ程に、彼らは追い詰められているのだ。

「……そろそろ行くよ。シエルも後から来てくれ」 そう言って、ミランはどこかへ走り去って行った。

一人残された少女は、静かに眼を閉じた。そんな彼女の瞼の裏に去来したのは、希望か、それとも絶望なのか……

暫く経った後、ミランが戻って来た。しかし、その尋常ならざる様子を目の当たりにしたシエルは、眉を顰めた。何かあったのか？
「た、大変だ！ シエル！」

ミランは仲間内では、リーダー的存在として頼りにされている。その彼が必死の形相を浮かべていた。不測の事態が起こったとは思えない。

「奴等が来たんだ……！ ネオ・アルカディアがッ！」

ミランの叫びを聞いたシエルの顔がみるみる青褪めていった。その時、遠くで爆発が起こり、地響きが大地を駆け抜けた。

偽書 ロックマンゼロ

英雄再誕〈re-birth〉

「ハア……ハア……ハア……ッ！」

シエルは走っていた。迫る驚異から逃れる為に。

背後では、銃声や悲鳴、爆発音などが一緒くたになった混沌じみた音色が奏でられていた。それを耳にしたシエルは恐怖に突き動かされ、必死に脚を動かして、先行するミラン達を追いかけた。

シエル！

その時だった。シエルが耳元で何者かの声を聞いたのは。そして、それは彼女のよく知る声だった。

「パッシイ！？ パッシイなのね！」

頭に付けていた特殊ゴーグルを目元の位置まで下げたシエルは、何も無い虚空へと視線を向けた。否、正確には何も無い訳では無い。ただ、見えないだけで、確かに存在しているのだ。『電子の妖精』の異名を持つプログラム生命体 サイバーエルフ・パッシイが。

シエル、この先に強い力を感じるわ。多分、そこに……。

本来ならば、人間には視認する事が出来ない筈のプログラムの友人をゴーグル越しに見たシエルは、安堵すると共に焦りを感じた。

『ネオ・アルカディア』の襲撃を逃れる為に遺跡の内部へと逃げ込んだまでは良かったのだが、風化が進んでいた通路のあちこちは崩れ、塞がっており、まるで迷路のようになっていた。その上、散発的に繰り返される小競り合いにより十人以上いた筈の仲間達は、今

やシエルを含めて僅か五人程にまで減っていた。このままでは、全滅してしまうかもしれない。

だが……それでも……

それでも、手に入れなければならぬモノがココにあるのだ。

「パツシイ、それは確かなの？」

「うん！」

シエルは、今まで心の奥底に沈殿していた疑念が、確信へと昇華されてゆくのを自覚した。

「ミラン！」

「了解だ！ シエル！」

シエルとパツシイのやりとりを全て聞いていたミランは、懷から暗緑色の鉄の塊を取り出した。手榴弾だ。

やがて走るシエルらの前に、巨大な鉄扉がその姿を現した。

ソレは他のモノとは違い、あまりにも大きく、あまりにも圧倒的だった。しかも、中央の宝玉状のコアを中心に、光が複雑な軌道を描きながら扉の表面を走っている。これらの異様さから、この扉の向こう側が重要な区画だと言うのは、ほぼ間違い無いだろう。

大扉を視認したミランは、手榴弾の安全ピンを引き抜き、巨大な威容目掛けて投げつけた。

「皆、伏せるッ！」

ミランの声を合図に、後方のシエル達は、一斉に地面に伏した。そして

冷たい鉄の塊が灼熱の焰へと変わった。

空間をも揺るがす轟音と、猛然と吹きつける熱風。それをやり過ぎ、顔を上げたシエル達の瞳に映ったのは、崩壊した扉とその向こうに広がる暗闇だった。

あそこには、自分達の求めるモノがある……

希望が再び確信に変わるのを自覚したシエルは、疲弊した身体を起き上がらせると、覚束無い足取りで歩き出した。

「……行きましよう、みんな。あそこに、私達の希望が……」

大扉の向こう側の空間は、百余年の間、外界から遮断されていたにも関わらず、澄んだ大気が満ちていた。

「……………」

もしかしたら、この場所は本当に侵してはいけない場所なのかもしれない。シエルの脳裏に、そんな疑念が頭をもたげ始めた時、奥の方を探索していたミランが上擦った声を上げた。

「お、おい！ 来てくれ、みんな！」

その声を聞いたシエル達は、ミランの下へと走った。

周囲は闇一色だったものの、床までは風化していなかった為、走り回る事に支障は無く、ミランと合流するのはさほど苦にはならなかった。

「シエル、見てくれ」

シエル達が来たのを確認したミランは、手に持った大型ライトの光で、ある一点を示した。

「！？ こ、これは……………」

円形の白色光が照らした先に在るモノを目の当たりにしたシエル達は、揃って息を呑んだ。

円く切り取られた其処に在ったのは 人形だった。

アイマー

赤い鎧を纏うソレは、繰り糸の如く全身に絡み付いたケーブルも

マリオンネット

相まって、まるで壊れた操り人形の様にも見える。そして、その見た目から悪趣味な雰囲気纏わりついていた。だが

「ようやく…………… 見つけたわ……………」

それこそが、彼女達が探し、求めていたモノだったのだ。

「ゼロ……………」

人形 『ゼロ』の醸し出す独特の美しさに魅入られたシエルは、我知らず手を伸ばしていた。

「シエル！ 危ない！」

何かに気付いたミランが、背後からシエルの首根っこを掴んで引っ張った。その時、彼女の足にぶつかって跳ね上がった石塊がゼロの方へと飛んでいった。

「ッ！？」

次の瞬間、舞い上がった石塊が爆発したかの様に弾けて消失した。「これは……バリア？」 見えない壁の存在に気付いて、シエルは己の愚かさを恥じた。これだけ嚴重に封鎖されていたのだ。封印の一つや二つ、あつて当たり前。その事を失念していたなど、科学者として失格に等しい。

「シエル。コイツを解除する事は出来ないのか？」

「……ダメ。コントロール装置は全てバリアの内側にあるみたい」

シエルは、苦虫を噛み潰した様な表情で呟いた。

確かに、彼女の言う通り、封印のコントロール装置はバリアの内側 『ゼロ』の足下にあった。おそらくは遠隔操作も出来る様になつている筈だが、現在の装備ではどうしようも無かった。

「畜生オツ！ 折角、ココまで来たつて言うのに……」

悔しさの余り、仲間の一人が感情を乗せた拳を地面に叩きつけた。手に届きかけていたモノが再び離れていつてしまったのだ。当然の反応だろう。

しかし時刻む神は、彼女達に絶望する暇すら与えてくれなかった。突如、シエル達の背後から銃声が起こった。その直後、一番後ろに居た仲間の一人が、くぐもった呻き声を上げながら倒れた 撃たれたのだ。

振り返ったシエルの瞳に映ったのは、深紅の単眼を輝かせた鋼鉄の兵隊の群れが、自分達に銃口を向けている光景だった。

「くっ……」

ミランを先頭とした緑装束達が、各々手に持った旧式携帯銃を兵

隊の群れに向け、一斉に銃爪を引き絞った。

兵隊達も、腕部と一体化したバスターからエネルギー弾を掃射して、対抗した。

初めは、互角の戦いを繰り広げていた両者だったが、武器の性能差が、一人、また一人と緑装束達が倒れてゆき、最後にはミランと後方のシエルだけとなっていた。

「クソ……」

生き残ったミランが、決して諦める事無く戦い続けていたが、押し潰されるのは時間の問題だった。そんな中、一体の兵士がシエルの存在に気付き、彼女へと銃口を向けた。

「ッ!？」

兵士達のバスターが火を噴いた。刹那、シエルは死を覚悟し、思わず瞳を閉じた。しかし、いつまで経っても、死を運んでくるハズの痛みと衝撃が襲って来る事は無かった。

「……………?」

恐る恐る、眼を開けたシエル。

蒼色の瞳に映ったのは、自分を庇う様に立つミランだった。兵士達のバスターから彼女を護ったのだ。

「ミ、ミラン……」

胴体を貫かれ、立っている事すら奇跡に近いミランは、最後の力を振り絞って頭を巡らせると、シエルに微笑みかけた。

「シエル……みんなを……頼……む……そして……おれた……ちに……じ……ゆ……う……を……」

そう言い残し、ミランは地面に倒れ伏し、仲間達と同様にその命を散らした。

「あ……ああ……」

とうとう一人になってしまったシエルの心は、絶望に埋め尽くされてしまった。

漸く、理不尽な力に抗う術を見つけたと言うのに。もう少しで手に入ると言うのに! その代償に仲間達の命を差し出せと言うのか

！？

鋼鉄の兵士達が群れをなして接近してくるのにも気付かず、シエルはいる筈の無い神を、そして不甲斐ない己を呪い続けた。

もう疲れた……

ルウ！

もうどうでも良くなってきた。

エルウ！

いつそのこと、ココで

シエルウ！

シエルがその声に気付くまで、少しの時間を要した。

顔を上げた少女の虚ろな瞳に映ったのは、覚悟を決めた真剣な面持ちを湛えた小さな親友の姿だった。

「……パッシイ？」

シエル、私の力を使って。

「え？」

そうすれば^{プロジェクト}封印を解除出来るわ。

パッシイの提案に、シエルは愕然となった。

サイバーエルフは、一度その能力を発揮してしまえば、消滅即ち、死んでしまう。それを知っていたシエルは、友が^{パッシイ}そんな行為に走るのを許せなかった。

「ダメよ！ そんな事したらパッシイが……」

シエル。ここで貴女が死んでしまったら、みんなの事はどうするの？

「……………！」

みんなはシエルの帰りを待ってるの。だから、貴女は何としても生きなきゃいけないの！

悲痛な友の訴えは、絶望に覆い尽くされたシエルの心に一つの想いを蘇らせた。

そうだ。自分はこんな所で死ぬわけにはいかない。

帰りを待ってくれる者達に『希望』を持って帰るまでは、何が何で

も生き残らねばならない。泥を被っても、血を啜っても……

シエルは顔を俯けたまま、掌を前方に翳した。

「パツシイ」

……うん。

シエルの呼び掛けに応えたパツシイは、友の掌の中で、その身を光に変えた。

「ごめんなさい、パツシイ。私にもっと力があれば……」

ううん。アタシはサイバーエルフだから……多分、これで良かったんだよ。

「私、パツシイの事、絶対に忘れない」

シエルはおもむろに腕を上げた。それと同時に、光と化したパツシイは、その輝きを強めた。

アタシもよ、シエル………サヨナラ。

輝きが極限の域に達した。

シエルは、命を燃やさんとする友を、眠る機械人形 否、それを守護する封印壁^{プロテクト}へと向けた。

「パツシイーーーーッ！」

少女の哀哭と共に、電子の妖精はその命を全うした。友と、その後ろに居る者達の願いを叶える為に。

そして、光が、爆ぜた。

巻き起こった白亜は少女だけでなく、冷たい機械仕掛けの兵士達をも無へと染め上げた。

刹那、少女の頬を一筋の雫が伝った。

かつて、この世界には英雄が居た。

優しき蒼と強き紅。^{あか}

二人は、世界に災いをもたらす邪悪と幾度にも渡る戦いを繰り広げ、倒してきた。そして、世界に平和が訪れた時、全てを蒼に託し、紅は人知れず眠りに就いた。もう、自分が必要な時が来ない事を願って……

時は流れ、彼の偉業は伝説として、人々の間で語り継がれた。

光る刃を自在に操る紅の英雄、その名は

「ゼロ……」

光が収束し、一時的に剥奪された視力を取り戻したシエルは、眼前に佇む紅の影を見て、そう呟いた。

ゼロ それは、伝説の紅の英雄の名。

シエルの眼前に佇む影も紅の身体^{ボディ}を有していた。が、それ以上に目を引いたのは、ヘルメットから零れた鮮烈な輝きを孕む金色の長髪だった。見る者によっては、研ぎ澄まされた刃の様にも見えるソレは、紅のボディと相まって、恐ろしいまでの美しさを醸し出していた。

「……………」

静かに佇む紅の影は、ゆっくりと周囲を見回した。冷たい壁と群れなす機械、そして……

「あ……」

紅の影 ゼロに見つめられたシエルは、彼の瞳が何も映していない事に気付いた。

光無き黒瞳は、どこまでも深く、暗く、そして深かった。

シエルは吸い込まれる様にゼロの瞳を見つめていた。闇に隠された彼の心を覗き込むかの様に。その時だけ、彼女達の周囲は、時が

止まっているかの様に、静寂を孕んだ大気に満ちていた。

「あの　きゃあッ！」

張りつめていた空気を引き裂いたのは、シエル達を取り囲んでいた兵士の一人だった。それを口火に、残りの兵士達が一斉に攻撃を再開した。

死を運ぶ光弾の雨に晒されながらも、ゼロは動じなかった。それどころか、足下に落ちていたミランの銃を蹴りあげると、それを手に取り、引き金を引いた。続けざまに放たれた弾丸は、兵隊の単眼を　電子頭脳ごと　貫いた。

それによって、完璧だったハズの隊列に乱れが生じ、穴が出来た。それを見つけたゼロは、シエルを抱きかかえて走り出した。

「え？　ええッ！？」

状況を飲み込めていないシエルを尻目に、ゼロは走った。目指すは、鋼鉄の壁に出来たたった一つの綻び。

しかし、兵士達がそれを許すハズも無く、銃口は全てゼロとシエルに向けられる。が、紅き英雄は更に速く、迫り来る光弾よりも速く駆け抜ける。そして遂には、鉄の包囲網くわがねを突破する事に成功した。残された鋼鉄の兵士達は、直ぐに隊列を組み直して追跡に入ったが、その時には逃亡者の姿は完全に消失していた。

「ハア……ハア……」

あれから、どれ位時間が経ったのだろうか？

シエルは、呼吸を整えつつ、現在の状況を整理した。

あの部屋から脱出した後も、敵の攻撃を止む事は無かった。通路のあちこちに潜んでいた敵の熾烈な砲火に晒されたが、それでも何とか生き延びる事が出来た。ゼロのお陰で。

落ち着きを取り戻したシエルは、自分達が逃げ込んだ部屋を改めて見回した。他の部屋よりも広く造られた広間とも言える空間には、

朽ちかけた空つぽのカプセルが、幾つも並べられている。この事から、おそらくは実験棟か何かなのだろうと彼女は推察した。

最後に、シエルは眼前に立つ男に視線を向けた。

ゼロは、こちらをじつと見つめていた。

この広間に来るまで見せた戦闘能力は、正に英雄と呼ぶに相応しい。しかし、シエルには、どうしても引つかかる事があった。

それは、彼の眼だ。

ゼロの瞳はあまりにも暗く、深い。シエルは、そこから何かを見出だす事が出来なかった。本当に空つぽなのだ。

「……………あの」

暫し思考に重ねていたシエルだったが、やがて意を決し、眼前の男に呼び掛けた。

それに対し、ゼロは 僅かだが 目に見える反応を示した。

意志疎通が可能と確信したシエルは、続く言葉を紡ぎ出そうとした。その時

「きゃあああッ!？」

二人を分かつかの如く、鋼造りの床が弾け、その下から機械の巨人が出現した。

吹き飛ばされたシエルが、巨人の伸ばした腕かいなに捕らわれてしまった。

「…………ゼロ…………逃げて…………ぐうッ!」

苦しげに呻くシエル。鋼鉄の掌が彼女の身体を締め上げているのだ。

それを見たゼロは、すかさずバスターショットの銃爪トシガを引き、金色の光弾を放つ。しかし、兵士のボディの数倍の硬度を有する巨人の腕を破壊する事は出来なかった。ならば、とゼロは巨人の体躯へと狙いを変えた。が、全弾はじかれてしまう。よくよく考えれば

腕が強固ならば、身体は同等、もしくは、それ以上なのは道理だった。
ボディ

休み無く放たれる敵の攻撃を鬱陶しく思ったのか、巨人は口腔内に取り付けられた砲身から極太のレーザーを発射した。

ゼロはそれを回避した。が、滅びを孕んだ光の咆哮は、床、壁、そして天井を抉り、そこから生じた大量の瓦礫を彼の頭上に降らせた。それを巧みなフットワークでかわすと、剥き出しになった砲身内部機構目掛け、バスターショットを放つ。

その攻撃は命中し、巨人は一瞬たじろぐ。しかし、致命傷には至らず、巨人は依然として活動を続けていた。

ゼロは、未だ立ち続ける巨人を見据え、微かに眉を顰めた。攻撃が通用しない。このままではジリ貧だ。

巨人は、そんな敵手を嘲笑うかの様に咆哮すると、再び口腔内に光を集めた。今度こそ全てを滅するかの如く。

その時。

ゼロ……

ゼロの背中に面した壁に備えつけられていたコンピュータ端末のモニターに光が灯り、そこから中性的な少年の声がしたのは。

振り返ったゼロ。その瞬間、彼の足下に何かが刺さった。

「！」

それは剣だった。白い金属製の柄と三角形を象った光の刃で構成された一本の剣。

ゼロは、何故かソレに懐かしさの様な感覚を覚えた。まるで、そう、遠い昔からの友の様に……

サア、ハヤクソレヲツカッテ……

それは、原子モデルの様なモノを表示したモニターから発せられる声に対しても同様だった。聞いていると、どうしようもなく懐かしい感覚に襲われる。

ゼロは、その事について訊ねようと口を開いた。

「お前は」

キミハカノジヨヲタスケタインダロウ？

遮る様に発せられた声により、ゼロはシエルの事を思い出した。だが、その時には、巨人は光の奔流を咆哮に乗せて放っていた。放たれた光は、ゼロを呑み込み、床を穿った。部屋中が灰色の灰塵に包み込まれる。それを目の当たりにしたシエルの顔は青ざめ、巨人は歓喜にも聞こえる低い駆動音を上げた。

やがて、塵混じりの濃霧が晴れ、辺りの景色が明瞭になり始める。そして、霧の中心部が微かに揺らめいた刹那、一筋の光が灰塵を切り裂き、吹き飛ばした。

「あ……」

シエルは、驚愕に眼を瞠った。光の直撃を受けたゼロが無傷で佇んでいたからだ。そして、その手には光の剣が握られていた。彼はそれを駆使して、光の咆哮を受け流したのだ。

「ゼロ……」

光の剣を持つ男の姿に、シエルは我知らず歓喜にうち震える。伝説では、紅き英雄は光の剣を振るっていたと言われていた。今のゼロは、正に伝説の通りの姿だったのだ。

光の剣構え直したゼロは、敵手目掛けて走り出す。対する鋼鉄巨人も、再び滅殺の咆哮を放たんと口腔に光を収束させた。だが、ゼロはそれよりも疾かった。

一瞬で巨人の鼻っ面に飛び込んだゼロは、光の剣を勢い良く降り下ろした。

縦一閃！

砲身ごと頭部を切り裂かれた巨人。その直後、充填されていたエ

ネルギーが捌け口を失った事で暴発し、鋼鉄の巨体が紅蓮の焰となつて爆ぜた。

目覚めてから最初に見えたのは、暗闇だった。

一瞬、自分は死んでしまったのか？ と錯覚したシエルだが、身体中に残る疲労感がそれを否定した。

どうやら、先程の戦いの時、いつの間にか気を失っていたらしい。シエルは頭を巡らせ、周囲を見回す。すると、すぐ傍らでゼロが自分を見つめている事に気づいた。

シエルは、横たえていた身体を起こした。その時、視界の端遙か上方に大きな穴がある事に気づいて、彼女は自分達が今何処に居るのかを悟った。

「……奴の爆発から身を守るには、こうするしか無かった」

横合いから掛けられた声に、シエルの身体が小さく跳ねた。今まで、一言も喋らなかったゼロが初めて言葉を発したのだ。驚くのは当然だろう。

ゼロの声は限界まで研ぎ澄まされ、芸術品の域にまで達した刀剣の様な強さと無骨さを感じさせた。思わず、その声に聞き惚れてしまいそうになった。が、かぶりをぶんぶん、と振って、何とか気を取り直した。

そして、先程上で聞こうと思っていた事を訪ねようと、神妙な面持ちで言葉を紡ぎ出した。

「ゼロ……。貴方に聞いておきたい事があるの」

そこまで言つて、シエルは『その先を』を言うのを躊躇してしまつた。

もし、そうじゃなかったら……

その疑念が、彼女に次の一步を踏み出させない為の枷となっていた。しかし、いつまでもこうしてはいられない。意を決したシエル

は、続く言葉を紡いだ。

「貴方は……本当に『ゼロ』なの？」

勿論、シエル自身は彼がゼロだと信じている。先刻の戦いを見ているから尚更だ。しかし、万が一、そうでは無いとしたら……

心中で葛藤する少女に、ゼロが返した答えは淡々としていた。が、その内容はシエルの予想の斜め上を行っていた。

「……解らん、何も思い出せない……」

額を抑え、呻く様な声で漏らすゼロ。百年にも渡る永い眠りの中で、紅きの英雄はその記憶を失っていたのだ。

それを知ったシエルの心に去来したのは、安堵とも、落胆とも言えぬ複雑な感情だった。

「……取り敢えず、一緒に来て。私達の基地に案内するわ」

しかし、それでも……

「いいのか？ 俺はその『ゼロ』じゃないかもしれないんだぞ？」

「それでも……私にとって貴方はもう『ゼロ』なのよ」

シエルの想いを聞いたゼロは、眼前の少女の蒼瞳を見つめた。

一方、シエルは光を映さぬ黒瞳の孕む妙な威圧感に眼を背けそうになったが、精一杯の意志を以て見つめ返した。

やがて、全てを悟ったかの様にゼロは瞼を閉じた。

「……俺も、一つ訊いてもいいか？」

幾星霜の時を越え、深き眠りから目覚めた紅の英雄。

彼は己が記憶を失い、その存在意義すら見失っていた。だから、

彼は問うた。自分を眠りから解き放った少女に。

俺を目覚めさせて、どうしようって言うんだ

.

英雄再誕（re-birth）（後書き）

どうも、稀代のダメ人間のスケイスです。
偽書ロックマンゼロ第一話投下しました。

序章から一週間で次話更新は奇跡に等しいです。僕のペースでは。

今回は、ゼロのオープニングステージを下敷きにしてるんですが
……まるで違いますね。

あれじゃあミランが主役っぽく見える様な……

まあ、この作品のスタンスは『本物に良く似たパチモン』なので、
それを踏まえて読んで頂ければ幸いです。

理由（reason）

人間に極めて近い機械人形 ロボット レプリロイド。

彼等は常に人間の傍らに立ち、時にその力となる事で共に、降りかかる幾多の困難を乗り越えていった。やがて、地球最後の理想郷・ネオ・アルカディアが誕生した事で彼等には永遠の『平和』約束される……ハズだった。

降り注ぐ光が強ければ強いほど、大地に刻まれる影は暗く、そして深いのだ。

ネオ・アルカディアは、レプリロイドにとっては地獄の世界だった。イレギュラー撲滅の名の下に、次々と処分される罪無きレプリロイド達。たとえ、運良く逃げ延びる事に成功したとしても、ネオ・アルカディアに彼等の居場所は無かった。そうして、樂園から追われた者達の多くは反抗組織 レジスタンスの一員として生きてゆく事を余儀無くされた。

「レジスタンス、か……………」

それがココに来て、一番最初に発した言葉だった。

廃研究所でメカニロイドから助け出した少女に連れられたゼロは、レジスタンス・ベース　ネオ・アルカディアに反抗する地下組織の拠点　へと足を踏み入れていた。

シエルと名乗った少女によると、この基地はネオ・アルカディアが出来る以前に主流だった大都市跡の地下施設を再利用していると。その為か、ベースのあちらこちらに老朽化した箇所が目立つ。この状態で攻撃を受けでもしたら、ひとたまりも無いだろう。

視線を落とし、辺りを見回すと視界の端に、チラチラと幾つもの人影が映った。

ココの住人だろうか？

通路の陰、柱の陰、扉の陰、コンテナの陰。ありとあらゆる場所から彼等はゼロを、その暗く濁りきった瞳で見つめた。視線を巡らせると、彼等は逃げる様に身を隠した。

「……ごめんなさい。だけど、みんな悪気は無いの」前方を歩くシエルが申し訳なさそうに言った。「ただ、ネオ・アルカディアとの戦いに疲れ果ててしまっていて、外から来た人に対しては、どうしても頑なになつてしまふのよ」

その言葉を聞いて、納得した。彼等の眼の奥底に沈殿していたのは、諦念だ。反抗する者でありながら、抗う事も、戦う事も、あまつさえ生きる事さえも諦めてしまっているのだらう。

「……着いたわ」

前方を歩いていったシエルが足を止めた。視線を戻したゼロは、彼女の前に流線形の機械が鎮座している事に気付いた。古びた乳白色のシルエットは、獣の唸り声に似た駆動音を放っていた。

「これは？」

「トランスサーバーよ。一定の範囲内なら、コレを使って色々なモノを転送する事が出来るわ」

振り返ったシエルは、真剣な面持ちでゼロに告げた。

シエルと機械を交互に見たゼロは「……俺に何をさせるつもりだ？」と問いかけた。その直後、少女の小さな肩がまるで何かを恐れるかの様に小さく跳ねた。そのまま顔を俯けた彼女の表情を窺う事は出来なかったのだが、唇を強く噛み締めていた事だけは解った。

暫くの間、両者の間に重い沈黙が横たわった。

やがて、シエルは「さつきも話したけど、私達はネオ・アルカディアと戦っているの」と告げて、顔を上げた。病的なまでに白い肌は血の気を失い、青ざめていたが、サファイア色の瞳には何かを決意したかの様な真っ直ぐな輝きが宿っていた。

「だけど、所詮ゲリラ戦しか出来ないレジスタンスとネオ・アルカディアとでは力の差は歴然　　多くの仲間の命が失われたわ」

その時、一瞬だけシエルの瞳に濁りが差した。先程見た住人達のソレにとても良く似ていた。

「でも、ね……まだ捕虜として生きている仲間もいるの！　せめて、彼等だけでも……！」

ゼロにも、漸くシエルが何を言おうとしているのかが解った。彼女はネオ・アルカディアに捕らえられた仲間の救出を自分に頼もうとしているのだ。その様子から、それが一筋縄ではない事は容易に推測出来た。それに、自分達で対処しきれぬのならば、わざわざ得体の知れない旧式レプリロイドに頼む必要など無い。問題はそれを受けるかどうかだが……答えは考えるまでも無かった。

「……何処に行けばいい？」

「え？」

「そいつらを助ける為には、俺は何処に行けば良いんだ？」

澱みの無い口調で告げた答え。それはシエルの青ざめた顔を喜びに彩るのに充分すぎる力を孕んでいた。

生氣を取り戻した少女の唇から「本当に……本当に行ってくれるの？」と歡喜の言葉が溢れ出す。ゼロは黙って頷いた。それを見たシエルが、今にも泣き出さんばかりの表情を浮かべた。

「じゃあ早速　　」

「待て、シエル」

続くシエルの言葉を遮ったのは、後方の通路から現れた男達の先頭　一際目付きの鋭いレプリロイドが発した声だった。

「シエル、こんな胡散臭い奴になんか頼む必要は無いぜ。仲間の救出なら、俺達コルボーチームが任せろ！」

「胡散臭いって……ゼロは　　」「百年前の骨董品、だろ？　こんな奴に力を借りなくなっちゃって、俺達コルボーチームだって充分に戦える！」

先頭の男　コルボーが、悔しげに唸る様な声でそう言った。そ

の後、ゼロを睨み付けると威圧する様な口振りで凄んだ。

「テメエの実力がどんなもんかは知らねえが、俺達の邪魔だけはするんじゃないぞ……ッ！」

半ば恫喝じみた忠告だったが、それに動じるゼロでは無い。そんな彼の反応の薄さが気に食わなかったのか、コルボーは面白く無さそうに舌打ちし、仲間達を引き連れて去っていった。

ゼロは、その後ろ姿を無感情に見つめた。

「ごめんなさい、ゼロ。彼も悪気があった訳じゃないの……ただ、ちよつと気が立ってて……」

おそらくは、彼女の言う通りなのだろうが、ゼロにはそれだけではない様な気がした。視線を巡らせると、心配そうにコルボーの背中を見つめているシエルに問うた。

「アイツも救出作戦に参加するのか？」

「え、ええ。多分……」

シエルの顔には、相変わらず暗い影が差している。先程、彼女はゼロにこう言っていた。

ネオ・アルカディアとの力の差は歴然。

多くの仲間を失った。

彼女は感付いているのかもしれない。このまま、あのコルボーと言つ男を行かせたらどうなるのか？……

「トランスサーバーソイツを起動させろ」

深く考えて出た言葉では無い。ただ、この少女に涙を流させてはならない、そう直感したのだ。

「今すぐ出る……！」

ネオ・アルカディア本都の遙か南方　荒涼とした大地の上に、その施設はあった。完全に機械化された其処は、日々本都から吐き出される廃棄物スクラップを休まずに処理し続けている。一見すれば、何の変哲も無い廃棄物処理場に見えるだろう。だが、そこにはあるもう一つの『顔』が存在していた……

結局、シエルの判断でゼロはコルボーチームと行動を共にする事になった。そのせいでコルボーが終始不機嫌な表情かおを浮かべていたが、それは彼の感知するところでは無かった。今は任務遂行ミッションが全てだ。

トランスサーバーによって転送させられた場所は、一面の荒野だった。枯れ果てた大地には、命の気配は感じられず、乾いた風が無慈悲に吹き荒ぶだけだ。

ゼロ、聞こえる？

ゼロは、ヘルメットに内蔵された通信機から流れるシエルの声に耳を傾けた。出撃前にセルヴォと言う技術者が取り付けたモノだが、問題なく作動している様だ。

「大丈夫だ。聞こえている」

そう……じゃあ、これからミッションの概要を再確認するわ

シエルの口調が硬化した。それは、十四の少女がレジスタンスの指導者になつた瞬間だった。

現在、貴方達のいる場所は目的地の廃棄物処理施設から南方五キロに位置する砂漠地帯よ

吹き荒れる砂嵐の向こう側にうつすらと建物の様なモノが見える。それこそが、多くのレジスタンス隊員達が捕らえられた廃棄物処理施設、否、レプリロイド処刑場だ。

今回のミッションは、捕らえられた仲間の救出が最優先よ。無駄な戦闘は極力避けて

ヘルメット内のスピーカーから流れるシエルの声を、ゼロは黙って反芻した。滔々と紡がれる言葉を一つ一つを己が身の内に取り込み、溶かしていった。視線を僅かに巡らせると、同じ説明を受けているであろうコルボーチームの面々の表情には緊張の色が浮かんでいるのが見えた。ただ一人、コルボーを除いて。

「どう言う事だ、シエル！ 俺達に戦うなっ言うのか！？」

最後まで聞いて コルボーが凄まじい剣幕でがなり立てるが、通信機の向こうのシエルは、構わず説明を続けた。この施設は、どうやら『ミュートスレプリロイド』が管理しているらしいの。その単語が出た瞬間、ゼロ以外の コルボーチームの面々が一斉に息を呑む気配が辺りに広がった。暫くして誰かが弱々しい口調で、ぼつり、と呟いた。

「や、やばいんじゃないのか……」

それが発端となり、ざわめきの波紋は瞬く間に広がっていった。マジかよ、なんでこんなトコロに、こりや逃げた方が良いんじゃないか、ミュートスレプリロイドに勝てる訳ねえよ……

絶望的な喧騒が蔓延し、先程まで勇ましく振る舞っていたレジスタンス隊員達が悲観的な慟哭を上げる中、一人だけ平静を保っている者が居た。ゼロだ。

「シエル」

どうしたの？ ゼロ

「何なんだ？ そのミュートスレプリロイドと言うのは」

そう問うて、シエルがが答えるまで僅かな間があった。その後、漸く発せられた声を聞いた時、ゼロはそれが酷く震えている事に気付いた。

……ネオ・アルカディアには、軍部にあたる四つの戦闘部隊があるの。

彼等はネオ・アルカディアに仇成す反逆者^{イレギュラー}を狩る者 言うならば『イレギュラーハンター』。その力はパンテオンなんかとは比べ物にならないわ

「イレギュラー……ハンター……」

シエルの説明を聞いたゼロは、その単語に妙な引つ掛かりを覚えていた。かつて、どこかで聞いた様な……そんな懐かしさを感じさせる言葉だ。だが、それが何なのかをどうしても思い出す事が出来ない。まるで、頭の中に濃い靄もやがかかった様だった。

「お、おい！ あれを見る！」

コルボーチームの一人が上擦った声で騒ぎ立てたのは、そんな時だった。その場にいた全員が、彼の指し示す方へと視線を巡らせた。彼等の見つめる先　スクラップ処理場の通用門ゲートから大量のレプリロイド兵士・パンテオンがレジスタンス目掛けて殺到した。その軍勢は、ゼロを含めて二十人にも満たないレジスタンスと比べて、倍以上の数を有していた。

レプリロイドでありながら、一切の表情を感じさせない紅の単眼モノアイ。それは、妖しい光を放ちながら、倒すべき敵を見つめている。

「……シエル、ナビゲートを頼む」
え？

シエルが疑問の声を挟むより早く、ゼロは駆け出した。

金色の軌跡を伴った紅い残像は、戦おのくレプリロイド達を尻目に単身、機械兵士の群れに突っ込んでいった。突然の事に啞然となるコルボーチーム。リーダーであるコルボーもその一人だったが、一足早く我に返った彼は、放心状態の部下達を叱咤した。

「ぼ、ボサツとすんじゃねえ！ 俺達も行くぞッ！」

その怒声に促され、正気を取り戻したコルボーチームの面々は、リーダーであるコルボーに筆頭に単身、敵陣に切り込むゼロに続いた。

その空間を覆っていたのは、無数の映像だった。虚空に隙間無く映し出される無数の顔。男、女、若者、老人　矩形の奥からこち

ら側を覗く幾多の眼差しを、彼は受け止めていた。

白を基調としたボディに猛禽の意匠を孕むシルエット。言うならば、その姿は 鋼の神鳥。

彼の名はアステファルコン。イレギュラーに裁きを下す処刑人の異名を持つミュートスレプリロイド。

猛禽に似た頭を持ち上げたアステファルコンは、ゆったりと部屋全体を見回した。そして、大仰に両手を広げると、芝居がかった口調で語りだした。

「大変長らくお待たせ致しました。これより、皆様方には私、アステファルコンによるショウを御覧頂きます！」

大袈裟な仕種を交えながらアステファルコンは、無数の映像に語りかけた。直後、重厚なクラシック音楽をバックに、彼の周囲の床がスライドした。その中から現れたのは三本の十字架と、磔にされた傷だらけのレプリロイド達だった。

「ここにいるのは、愚かにもネオ・アルカディアに反旗を翻した逆賊^{イレギュラー}に御座います」

アステファルコンが言い終わると同時に、円形のスポットライトが十字架を照らし出した。白光が暴いたのは、緑の装束を纏ったレプリロイド レジスタンスだ。

「所詮、彼等は生き永らえたトコロで意味など無い罪深き存在……で、あるならば！ その命を以て！ 皆様方の糧になる事こそ最後に残された贖罪！」

アステファルコンの宣言が高らかに響き渡る。その直後、映像越しの拍手が暗い処刑場を埋め尽くした。それは、処刑人たる鋼鉄の神鳥への喝采であると同時に、罪人達へと忍び寄る死神の足音でもあった。

やがて、恐怖に耐えきれなくなったレジスタンスの一人がアステファルコンに向かって叫んだ。

「た、助けてくれ！ もう二度とネオ・アルカディアに逆らう様な真似はしない！ だから……」

オイルまみれになった唇から、必死に命乞いの言葉を吐き出すレプリロイドをアステファルコンは一瞥した。冷たい猛禽の眼に映るのは、大義や信念かなぐり捨て、己の弱さを晒け出した惨めなヒトガタ。

「……そうですか」

アステファルコンは、溜息混じりにそう言った。それを聞いたレプリロイドの顔に怪訝そうな表情を浮かぶ。

「では、まずは貴方からです」

恐らく誰一人、何が起きたかは理解出来なかっただろう。大気の温度が僅かに下がった。精々、その程度だ。それ位、鋼の神鳥の所作は速かったのだ。

不思議に思ったレプリロイドの一人が、周囲を見回した。そして、先程無様に喚き散らしていたレプリロイドの姿を視界に収めた瞬間、思わず息を呑んだ。

命乞いをしていたレプリロイドの胴体に、巨大な雷の矢が突き刺さっていたのだ。既に動きを止めている筈の機械の亡骸が小刻みに痙攣している。残された者達の心に恐怖を植え付けるのには充分過ぎた。

直後、処刑場に歓喜の叫びが訝した。

「フフフ……宴はまだ始まったばかりです……どうぞ最後まで心ゆくままにお楽しみ下さい」

コルボーチームとパンテオン部隊の攻防は、一進一退の様相を呈していた。

圧倒的な物量を誇る単眼の軍団に対し、数々の修羅場をくぐり抜けて来たコルボー達は、劣勢に立たされながらも必死に喰らいつい

ていた。リーダーであるコルボー自身も指揮を執りつつ、先頭に立って戦っていた。

「いいか、野郎共オ！ 絶対に背中見せんじゃねえぞッ！」

半ば己に言い聞かせるかの様に、部下達を鼓舞したコルボー。背中でのその返事を聞くと、満足気に唇を歪めた。

そうだ。俺達でもやれるんだ。あんなヤツの力を借りなくとも……ッ。

敵陣に切り込んだコルボーは、口の中でそう一人ごちた。その時だった。彼の眼前を紅い閃光が横切ったのは。

真紅の装甲《アーマー》と鮮烈な金色の長髪　ゼロだ。

光の剣を振るう紅の“英雄”は、視界を埋め尽くす機械兵士の群れの発する圧迫感に、欠片も物怖じする様子も見せなかった。眼前に立ち塞がる敵を斬り伏せる。ただ、それだけ。だが、あまりにも圧倒的だった。

しかし、それがコルボーを益々苛立たせた。自分達には、それなりの修羅場を潜ってきた自負、そして自信もある。だが、それでもネオ・アルカディアの尖兵たるパンテオンシリーズに対しては苦戦を強いられるのが現実だ。なのにあの旧式レプリロイドは、たった一人で機械兵士の大部隊を相手にしているではないか！

「……クソツタレ」

今までの自分達の戦いが否定された気がしたコルボーの舌から転がり出た小さな悪態は、戦場の大気に掻き消された。

「オイ！ 野郎共　待てよ……」

後続く部下達に新たな命令を下そうとしたその時、彼の脳裏にある妙案が浮かんだ。己の前に立って戦う紅の背中を一瞥し、唇を歪めると、部下達に新たな命令を下すべく声を張り上げた。

「一気に突っ切るぞ！ 雑魚は“英雄”サマが倒してくれる！」

「！？」

コルボーの発した命令を聞いたゼロが振り返ったが、構わずその横を通り過ぎた。

「後は頼んだぜ、“英雄”サマ」

すれ違い様に、コルボーは嘲る様な口調で、ゼロに囁いた。折角蘇ってくれたのなら……精々利用させて貰うとするさ。俺達の為にな。

コルボーチームを止めようとしたゼロだったが、残ったパンテオンの群れに阻まれ、そこから先に進む事が出来なかった。眼前に立ち塞がる大量の紅の単眼が妖しく揺らめいている。それを睨み付けた彼は、おもむろにバスターショットのマガジンにゼットセイバーの柄を『装填』した。

一方の機械兵士達はゼロの挙動を警戒し、一定の距離を保っていたが、やがて危険は無いと断じたのか、最前列の数体が腕のバスターを变形させた電磁ブレードを翻して飛び掛かった。電光を孕んだ刃が斬り刻まんと大気を裂きながらゼロへと迫った。しかし、当の本人は視線を揺らす事無く己を砕かんとする雷刃の切っ先を見据えた。

そして、交錯の瞬間、頭を僅かに傾けると同時にバスターショットを持った腕を跳ね上げた。

刹那 圧倒的な熱量が虚空を駆け抜けた。

バスターショットから放たれた鮮緑の光流は、眼前に立ち塞がる機械兵士の群れを一体残らず飲み込んだ。留まる事無く突き進んでいったソレは、通用門を破壊し、砂塵が吹き荒れる荒野へと消えた。後に残ったのは半ば溶解したパンテオンの残骸と、頬を掠めた電磁ブレードだけだった。

ぜ、ゼロ……

シエルからの通信だった。その声音から通信機の向こうで、呆然

とした表情を浮かべる彼女の姿を想像するのはそう難しい事では無かった。

今、ゼロの周囲に居たパンテオンの反応が一気に消えちゃったんだけど……

「時間が無かったからな。一気に片付けた」

え、ええッ!?

淡々としたゼロの答えを聞いたシエルは、通信機越しに上擦った素っ頓狂な声を上げた。その後ろでは、サポートを勤めるレジスタンス隊員達がどよめいていた。

彼女達は何をそんなに驚いているのかゼロには理解出来なかったが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

「シエル。先に言った奴等の反応を追えるか？」

え、あ、うん。大丈夫よ、出来るわ

「了解した。なら奴は」

続きを言おうとしたゼロだったが、直上から降り注ぐ殺気を感じ取り、反射的にその場から跳び退った。直後、先程まで立っていた場所に小さな弾痕が連続して穿たれた。それを一瞥した後、彼は殺気を感じた方向を見上げた。

上空からゼロを見下ろしているのは飛行ユニットを装着し、悠然と虚空に佇んでいるライトグリーンのパンテオンだった。薄暗い空間の中で、禍々しく輝く真紅の単眼は、獲物を見つけた猛獣の眼まなこによく似ていた。

「……生憎、今は貴様に構っている暇は無い」

ゼットセイバーを片手に、ゼロは敵手　パンテオン・エースを睨み付けた。こんな所で時間を無駄にしている余裕など無い。

「悪いが、そこを通らせてもらうぞ……ッ！」

旧式の貨物式エレベーターのゴンドラに揺られながら、コルボー

たであろう何人が気後れする気配を、コルボーは背中を感じ取っていた。しかし、今更引き返す訳にはいかない。もう前に進むしかないのだ。

深呼吸を一つ。はやる感情を落ち着かせながら、おもむろに鉄扉に手を添えた。

少し力を入れるだけで扉はアツサリと開いた。ここまで簡単に事が運びすぎて、かえって不気味に思えたが、今はそんな事を気にしている場合では無い。

ゆっくりと開いてゆく鉄扉から光が漏れた。網膜センサに刺さる眩しさにコルボーチーム全員が目細めるか、掌を顔の前に翳すなどの行動を取った。やがて、センサの処理が追いついてきた事により、扉の向こう側に広がる景色を認識出来る様になった。

そして、彼等は絶句した。

この施設に飛び込んでから通過した部屋の中でも、そこは一番広かった。機械を剥き出しにした壁面。闇が溜まった天井。彼等が足を踏み入れたのは、おおよそ飾り気の無い空間であった。

だからなのだろう。それが真つ先に彼等の視界に入り込む事が出来たのは。

部屋の中央には、不格好な鉄のオブジェが鎮座していた。それは

アヴァンギャルド

無秩序で前衛芸術的なデザインでありながら、おおよそ芸術とは縁遠いコルボーチーム達の目を釘付けにしていた。しかし、それは美しさによるものでは無い。その中に在るモノを彼等が見つけてしまったからだ。

「た、隊長……」

隊員の一人が呆然と呟いた。が、コルボーに答えてやれる余裕は無かった。一部隊を預かる彼ですら、目の前に広がる現実に、気が触れそうになっているのだ。

コルボーチームの眼前に、悠然と聳える冷たいオブジェ。それを形成していたのは、大量の鉄屑とバラバラに分断された仲間達の骸だった。

いてもたっても居られず、慌てて駆け寄ったコルボーチームだったが、それは仲間の死、と言う現実を改めて認識するだけだった。
「……ッ！」

コルボーは、手に持った小銃を床に叩きつけたくなる衝動に駆られた。また間に合わなかった。また助けられなかった。俺達は持てる力を尽くしたと言うのに……

「どうして……救えねェんだよッ！」

悔しさに歪んだ唇から漏れたのは、己の無力に対する激情だった。コルボーは身体の内奥から何かが沸き上がるのを知覚した。それは全身を這い回り、心を黒く塗りつぶそうとしていた。

その時だった。何も存在しないハズの虚空に、無数の矩形が出現したのは。

「な、何だアッ!?」

何の前触れも無く現れた幾多もの矩形　空間ビジョンに肝を潰された一人の隊員が錯乱し、携行していた機関銃を乱射した。出鱈目に撃ち出された弾丸は、実体の無い映像をすり抜け、壁面に小さな火花を散らせた。

このままでは他の隊員達が被害が及ぶと判断したコルボーは、暴れまわる隊員を怒鳴り付けた。

「オイ！　落ち着け！　……誰かソイツを黙らせとけ！」

コルボーの命令を受けた隊員達は、錯乱した隊員を押さえ込みにかかった。初めは意味不明な喚き声を上げていたその隊員も、動きを封じられると徐々に大人しくなっていた。

それを確認すると、今度は虚空に投影される映像に目を向けた。小さな枠の中に収まっているのは、様々な貌だ。その中の殆どに、コルボーは既視感デジャ・ビュを覚えた。

「コイツらは……ッ！」

そうだ。思い出した。この部屋を埋め尽くさんばかりの映像の向こう側に居る貌。それは全てネオ・アルカディアの特権階級　自分達を地獄の世界へと追い込んだ奴等だった。

「ホウ……思ったより数が多いな」

頭上から尊大な気性を滲ませた声が降ってきた。

咄嗟に頭を跳ね上げた彼等の視覚センサに映ったのは、天井に溜まる闇。其処は何者の存在を許さない空間でありながら、何か得体の知れない気配を感じずには居られなかった。

隊員の一人が、それを見つけ出したのもそのせいなのかもしれない。

「お、おい……」

彼が指差した先にあったのは、紅い光。気をつけていなければ見逃してしまいそうなほど小さな光点が二つ。まるで何かの眼の様に見えた。

視覚センサの感度を限界まで引き上げたコルボーは、その光を注視した。

刹那　それが嘲った気がした。

背中に冷たいモノが伝った。あれは……危険だ！

反射的に跳び退った時には、既に事は終わっていた。降り注いだ雷の雨が逃げ遅れた隊員の身体を切裂き、貫通き、打ち砕いた。目の前で無惨に壊されてゆく仲間達。だが、生き残った者達にそれを悲しむ暇は無かった。

闇の吹き溜まりから翼を持った影が、疾風を纏って飛び出してきたのだ。

「うわあああッ！」

吹き荒ぶ風が、その場に居る者達を全て吹き飛ばす。そして、まるで鉄屑のオブジェを守るかの様に、影はゆっくりと舞い降りた。太古の昔、知識の象徴として人々から崇められた聖獣グリフォン。断罪を使命とする王の守護獣は、科学のちからによって再び地上に顕現した。ミュートス・レプリロイド・アステファルコンとして。

神話にて語られる姿に酷似したアステファルコンの姿。だが、それが彼の全てでは無かった。ふわり、と舞い上がった鉄の神鳥の四肢が形を変え、鳥獣然としたシルエットをヒトに近いモノへと変貌していった。そして、最後に両の眼が禍々しく輝いた時、アステファルコンは鋼鉄の鳥人が再び地上に降り立った。

「パンテオン共がもつと数を減らしているとおもっていたが……ふむ、レジスタンスもなかなか侮れんな」感心した様な口調で、アステファルコンはそう呟いた。だが、その言葉の裏には絶対的な自信と傲慢が隠れていた。「ならば、丁度良い　いかがでしょうか、皆々様。ここから予定を変更して、この私アステファルコンと愚かなイレギュラー共による殺戮ショウを執り行うというのは!？」

翼と一体化した腕を広げ、アステファルコンは高らかに宣言した。直後、虚空に浮かぶ映像から響く拍手の音が部屋　否、処刑場を埋め尽くした。それを聞いたコルボーは、身体の内面に怒りの焰が燃え上がるのを知覚した。コイツらは楽しんでいるのだ。自分や仲間達が無様に殺されてゆく様を。

まるで、猛獣同士の殺し合いの見世物を見るかの如く……

「クソが……ッ！」

隠しきれぬ嫌悪感ごと、そう吐き捨てると己が衝動に従い、自動小銃を眼前の敵手へと向けた。

「ボサツとすんじゃねエ！　敵は目の前に居るんだぞ！」

隊長の激に呼応した隊員達も、一斉に手に持った火器の銃口を鋼の鳥人へと向けた。

これだけの火力があれば、いくらミュートスレプリロイドと言えどタダでは済まないだろう。そう確信したコルボーは、一斉掃射の号令を出すと共に、銃爪に掛けた指に力を込めた。

その瞬間、アステファルコンの瞳が笑みの形に歪んだ事に、だれも気付かなかった。

幾つもの銃口から放たれた十字砲火が鋼鉄の神鳥に降り注いだ。

数十、数百にも及ぶ灼熱の顎がエネルギー製の装甲に牙を突き立てる……ハズだった。

「な……ッ!?」

コルボーは驚愕するしかなかった。敵手を噛み砕くべくして放たれた弾丸が、全て弾かれてしまったからだ。

「クク……それで終わりか? イレギュラー」アステファルコンが嘲る様な口調でそう言い、翼を広げた。「ならば こちらから行くぞッ!」

刹那、鳥人の姿が幻の様に掻き消えた。

「ッ!?」

「ど、何処に行った!」

消えた敵手の姿を求めて、コルボーチームの面々は、各々視線を巡らせた。だが、想像を絶するスピードで戦場を駆け抜ける鋼鉄の鳥人を捉える事は、誰にも出来なかった。

「フハハハハッ! 遅い! 遅すぎるぞイレギュラー共オ!」

姿無き敵の哄笑は、その場に居る者達の心に恐怖と言う名の楔を打ち込んだ。そして、彼が再びコルボーチームの前に姿を現した瞬間

「があああああッ!」

苦痛に満ちた悲鳴と、いくつもの血の華が咲いた。

気づいた時には、アステファルコンは鳥人形態から神鳥形態へと、その身を変えていた。

そして、真っ赤な疑似血液を返り血として浴び、事切れたレプリロイドの骸をくわえるその姿は、もはや神獣と言うよりも、悪魔と呼ぶに相応しかった。

「わあああああッ!」

生き残った隊員の一部が、身体の奥底から沸き上がってくる恐怖を拭い去るかの様に小銃を乱射した。だが、鋼鉄の神鳥にそれが通らない事は明白だ。

先程と同様に、自らに喰らいつかんと鉛の牙を全て弾き返したア

ステファルコンは、骸を放り捨て、愉快そうに笑った。

「いいぞ。もつと抵抗しろレジスタンス共！ そうすれば、シヨウは更に盛り上がるウツ！」

再び加速したステファルコン。一瞬で鳥人形態へと変形し、敵手の背後へと回り込んだ。そして、彼等が気付く前に雷の矢を掃射した。

飛び散る疑似血液^{オイル}。撒き散らされる機械^{パーツ}。

先刻まで、十数名程いたコルボーチームも、今や隊長のコルボーを残すのみとなってしまった。

「あ……あ、ああ……」

半ば戦意を喪失したコルボーは、膝からくずおれた。

ベースを出る前まで、元気に笑い、馬鹿話などに花を咲かせていた仲間達は、今や物言わぬ只の骸となってしまうた。その事実を漸く理解した時、震える唇から零れたのは、声無き呻きだった。

「……ここまで、か」

つまらなそうに呟いたステファルコンが一瞬で彼に肉薄し、呆然と揺れる頭を思い切り踏みつけた。

その衝撃で顔面のフレームが歪んだのを知覚したが、コルボーにはもう顔を上げる力すら残されていなかった。

「ネオ・アルカディアは、この世界における絶対正義にして神そのもの」鋼鉄の神鳥が、哀れな信者を諭す神父の如く床に突っ伏すコルボーへと語りかける。だが、煌々と輝く猛禽の眼にたゆたっていたのは純粹なまでの傲慢と自らが特別な存在だと信じてやまない盲信だった。「例えどんな理想を掲げようとも、ネオ・アルカディアに仇なす貴様らイレギュラーは世界の敵なのだ！」

虚空を埋め尽くす映像から、歓声が沸き起こった。それに酔いしれるステファルコンは更に続けた。

「そして、世界の敵が行きつく場所は 地獄だッ！」

猛禽の眼に膨大な量のプログラムが駆け巡った。すると、それに連動して床面がその様相を変えた。

「……ッ!?」

光学迷彩機能が解除され、無機質なコンクリートから透明な特殊強化ガラス製へと変わった床。その遥か下方に、数人の緑装束が蠢いているのを、コルボーは見た。

アイツらは……まさか!

それは、捕まった筈の仲間達だった。漸く見つけた。コルボーの瞳にほんの一瞬、希望の光が宿った。だが

「あ……」

漸く灯った小さな明かりを呑み込んでしまう程、その後に訪れた絶望は大きかった。

閉ざされた眼下の空間。その両端の壁が徐々に狭まってきているのだ。にじり寄る恐怖に耐えるべく、身を寄せ合うレプリロイド達も天井の異変に気付いて次々と見上げたが、コルボーの姿を目の当たりにしたその顔には、更に深い絶望が刻まれた。

「……くそオ……ッ……」

コルボーは、血を吐く様な声で呻いた。

自分達の力では、誰かを救うどころか、守る事すら出来ない。

突きつけられた残酷な現実を前に、己の無力を否応なしに認めざるを得なかった。

「フハハハハハッ! 貴様を始末した後、仲間達も同じ処へ送ってやる!」

興奮気味に嘯いたアステファルコンが、コルボーの頭を踏みつけていた脚を上げた。踏み砕くつもりだ。

その時だった。神鳥の背後の壁が、轟音と共に吹き飛んだのは。映像の中の観客達がどよめく中、アステファルコンは振り返って崩れた壁を注視した。

もうもうとたちこめる粉塵。その奥から現れたのは、光の剣持つ紅きレプリロイド ゼロだった。

アステファルコンと対峙するゼロ。その脳裏には、先程シエルから聞いたある事実が去来していた。

「親友？」

パンテオンエースを倒したゼロは、直後に入ったシエルの通信に耳を傾けながら先へと進んでいた。

……ええ、貴方を目覚めさせる為の作戦に参加していたミラン。彼とコルボーの無二の親友　いえ、そんな言葉じゃ表しきれない間柄だったの

そう言う事が……。

その話を聞いたゼロは、何故コルボーが自分に対してあの様な態度を取っていたのか納得した。ようするに、彼はゼロの覚醒と引き換えにミランが死んだ事を上手く消化出来ていないのだ。

でも、ね……　本当はコルボーだって解ってるのよ。貴方に当たったって仕方ない事くらい。だけど、彼はああいう性格だから……

長年同じ時を過ごしてきたシエルが言うのなら　そうなのだろう、とゼロは思った。だが、そんな事は関係無い。己のやるべき事はただ一つ。

「シエル。コルボー達は、必ず連れて帰る　だから、待っている」
うん……

意識を現実へと引き戻したゼロは、視線を巡らせて周囲の状況を確認した。虚空を漂う映像^{ビジョン}。機械が散乱する見えない床とその下の空間。そして

「アレがミュートスレプリロイド、か」

処刑場の中心に泰然と佇む鳥人型レプリロイドを見据えると、無感情にそう呟いた。一目見ただけで解る。コイツは強い。

「ホウ……まだ仲間が居たのか」アステファルコンが感心した様に嘯く。「だが、誰であろうと私のシヨウを止める事は」

言い終わる前に、光の刃が神鳥の身体を捉えていた。

ゼロの放った高速の刺突は、神鳥の残像を確かに貫いていたが、咄嗟にウイング内のブースターを全開にして後退していた本体は、全くの無傷だった。

「お、おのれ！ 口上の最中を狙うとは……卑怯なツ！」

アステファルコンがヒステリックにかなり立てたが、ゼロはそれに答えるつもりは無かった。卑怯だろうが何だろうが、チャンスを逃す馬鹿はいない。それに長ったらしい口上をわざわざ聞いてやる道理も無い。

再度敵手の懐へと踏み込んだゼロは、右手の光刃を一閃させた。が、すんでの所で飛翔した神鳥には届かなかった。

すぐさま上方を仰ぐと、アステファルコンが雷の矢を放つ態勢に入っていた。解放されたコルボーを抱え上げたゼロは、急いでその場から離脱し、オブジェの陰へと滑り込んだ。

直後、大量の雷塊が先程まで立っていた場所に突き刺さった。喰らっていたら間違いなくやられていただろう。

「ククク……とことん愚かだよ、貴様達は」処刑場を飛び回るアステファルコンが、心底愉快そうに笑った。「力の無い者同士で群れるどころか、あまつさえ役に立たない足手まといをかばおうとするとは……やはり、クズの考える事は理解出来んな」

「クズ、だと……」

オブジェから顔を出したゼロは、アステファルコンにそう問うた。底冷えする低い声で。

「ああ、そうだ。ネオ・アルカディアという絶対の世界から弾き出された奴等などクズでしかない。もつとも、これから文字通りのクズになる貴様らには関係ないがな」

侮蔑でくるんだ言葉を吐いたアステファルコンが、視線を遙か下方に落とした。それを追ったゼロの眼も眼下の空間　もう一つの処刑場へと向けられた。

迫り来る死に対して、恐怖し、絶望に押し潰されようとしているレプリロイド達。その光景を目の当たりにした瞬間、ゼロは己が胸の奥底から何かが沸き上がってくるのを感じた。

「……確かに、貴様の言う通りなのかもしれないな」

「何？」

「アイツらが、この世界にとっての反逆者であるのは紛れも無い事実かもしれない。だが」

防壁として使用していたオブジェから姿を現したゼロ。その姿を目の当たりにしたアステファルコンは、思わず後退った。

今のゼロの佇まいには、ネオ・アルカディアの番人たるミュートスレプリロイドに、その様な行動を取らせてしまう程の強さと恐ろしさが内包されていた。

「だからと言って……命を理不尽に奪って良いハズが無い」

「ッ！　ほ、ほざけエッ！」

眼前のレプリロイドが放つ威圧感に耐えかねたアステファルコンは、自身のスペックの許す限りの雷の矢を作り出し、一斉に撃ち放った。

一つ一つが破格の威力を持つ雷矢。一発でも喰らえば、命取りになるそれが視界を埋め尽くさんばかりに、紅いレプリロイドへと雪崩れ込んだ。

対するゼロは眉一つ動かさず、セイバー一本でその全てを捌いた。獲物を仕留め損ねた雷の牙は全て後方の壁に突き刺さった。彼はすぐさま跳躍し、鋼の神鳥へと斬りかかった。

例え記憶が無くとも身体が覚えている。戦う術を。そして、魂の奥底から湧き上がるモノが教えてくれる　倒すべき敵を！

翻った光の刃が鋼鉄で形造られた翼を斬り裂いた。

冷たい音を立てて床に落着した己が一部を見下ろしたアステファ

ルコンは、その猛禽の眼に恐怖の色を滲ませると、本来は補助用であるはずのティールブースターを全開にして空中へと退避した。

「あ、あれじゃあ届かねえ……」

オブジェの陰からゼロとアステファルコンの戦いを見ていたコルボーが、呻きにも似た呟きを漏らした。

確かに、飛行能力を持たないゼロでは、今のアステファルコンの下へと辿り着く事はほぼ不可能だ。ここまま手をこまねいていれば、アステファルコンを逃がしてしまうのも時間の問題だろう。作戦全体を鑑みれば、これ以上戦闘を続行する必要は無く、敵を逃がしてこちらで撤退するという手もある。尤も、その場合はゼロの力を身を持って知ったアステファルコンの情報によって、ネオ・アルカディアは今度こそ本気でレジスタンスを潰しにかかるのは確実だ。そうなければ勝ち目は無い。

そうさせない為に、ゼロは跳んだ。だが、いくら英雄と呼ばれるだけの力を持っていたとしても、飛行している敵手を捉える事は出来ない。

ならば 届くまで跳び続けるだけだ！

「な……！？」

コルボーとアステファルコンが揃って絶句した。それ位、ゼロの取った行動は常識を逸脱していたのだ。

天空に佇む敵手を追うべく、ゼロは壁面を蹴り登った。

信じられない、とでも言いたげな瞳で自分を見つめるアステファルコンを捉えたゼロは、最後に大きく跳躍した。奇妙な浮遊感が身体に纏わりつくのを自覚しながら、ゼットセイバーの柄を両手を把持し、大きく振りかぶった。

狙うは……翼無き鋼の神鳥！

一刀、両断！

ゼロ自身のエネルギーを光刃に収束させた必殺の斬撃　チャージセイバーは、アステファルコンの脳天を砕き、そのまま身体を真っ二つに両断した。

着地したゼロは、おもむろに立ち上がると、未だエネルギーの燦るセイバーを軽く振った。刹那、破壊されたアステファルコンのハイ・エネルギー動力炉がチャージセイバーのエネルギーと反応し、紅蓮を撒き散らしてと共に爆砕した。

言葉が出なかった。いや、出せなかったと言った方が正しいのかもしれない。まるで安い娯楽映画を見ている様な気分だった。それ位、眼の前で繰り広げられた戦いは現実離れしていたのだ。

今まで自分達が束になっても敵わなかったミュートスレプリロイドを、いとも簡単に倒してしまった紅のレプリロイド。焔を背にしたその無機質な横顔に、コルボーは戦慄した。

コイツは、本当に百年前の旧式なのか？　否、それ以前にコイツは本当に、俺達と同じレプリロイドなのか？

そんな事を考えていたコルボーだったが、こちらへと振り向いたゼロと目が合い、我知らず身体をびくつかせた。そして、彼が一步步近づいてくる度に叫び声を上げなくなる衝動に駆られたが、殆どの機能が停止している身にそんな力はもう残されてはいなかった。やがて、ゼロが目の前で立ち止まり、右手を差し出してきたのを見たコルボーは思わず眼を瞑った。

俺は死ぬのか？　まだ、やるべき事があると言うのに。ふと、そんな事を考えたコルボー。いつまで経っても、想定していた瞬間が訪れない事に気付いて、恐る恐る臉を開けた。

「立てるか？」

目の前に差し出されたのは、掌だった。紅の装甲に包まれた無骨

なシルエットを有したソレからは、先程まで放っていた圧倒的な威圧感はなく、むしろ正反対の　穏やかな雰囲気微妙に感じられた。

何故、お前はこんな事が出来るんだ？　俺が利用しようとしていた事は気付いていたハズだ。それなのに……

そんな俊巡をよそに、ゼロがこちらを見つめている。揺るぎ無意思に支えられた真っ直ぐな眼差しで。

「下に居る奴等連れて戻るぞ。アイツが待っている」

それを聞いたコルボーは、ハッ、となった。今、目の前にいるこの男は嫉妬や敵愾心、それどころか名誉、自尊心などで戦っていた訳では無かった。彼は最初から最後まで、シエルという一人の少女の為に戦っていたのだ。

その事実に至った時、心の奥底で渦巻いていた黒い感情が徐々に霧散してゆくのを知覚した。そして、気付いた時には、差し伸べられた手を強く握りしめていた。

地下の処刑場へと続く道は、意外とすぐに見つかった。

入口付近に隠されていた扉の中に、エレベーターのゴンドラが隠されていたのだ。

人間サイズのレプリロイドが約五人程入れるゴンドラへと足を踏み入れたゼロは、先に入っていたコルボーが制御パネルを操作しているのを一瞥すると、エレベーターが動き出すのを待った。暫くすると、奇妙な浮遊感を伴いながらゴンドラが降下を始めた。

戦っている最中は気付かなかったのだが、どうやら地下フロアはおもったよりも深い場所にあるらしく、到着するまでにそれなりの時間を要した。その間、ゴンドラ内に充満していたのは、重い沈黙。ゼロにとっては、どうということの無い雰囲気だったのだが、コルボーにはいささか辛かったらしく、

制御パネルの前で所在無く身体を揺らしていた。

やがて、その空気に耐え切れなくなったコルボーが、粗雑な口調で「なあ」と声をかけて来た。

「さつきは……その……助かったよ。アンタが来てくれなかったら、多分……俺も死んでた」

揺れる背中から発せられるたどたどしい言葉。それが彼の精一杯の感謝であり謝罪であるのは、察するまでも無かった。返事の無い事を確認したコルボーが更に続けた。

「それとさ……悪かったな。あの時、アンタをしちまつてよ」

コルボーの言う『あの時』とは、おそらく通用門^{ゲート}での戦いの事だろう。ゼロは、その周辺の記憶^{メモリー}を探してみたが、彼が謝る様な要素は何一つ見つからなかった。だから、「俺は、俺のやるべき事をやっただけだ。お前が謝る必要は無い」と素っ気の無い無機質な口調でそう言った。

それを聞いたコルボーが、暫く黙り込んだ後ケツ、と小さく舌打ちした。

「……やっぱ、イマイチ気に入らねえわ、アンタの事」

傷だらけの背中から発せられた言葉には、彼特有のふてぶてしさが戻っていたが、それ以上に、過剰な程に攻撃的だった刺々しさが幾分か和らいでいた。

……口……ゼ……ゼロ、聞こえる？

シエルからの通信が入ったのは、エレベーターを降りてすぐの事だった。ノイズの向こうから聞こえてくる声には、どこか切羽詰った感情が滲み出ていた。

……ごめんなさい、その周辺にジャミングがかけられていたみたいで……

どうやら、シエルは先程の戦いのサポートが出来なかった事を悔

いているようだった。だが、それは彼女のせいではない。ましてや責任を感じる必要は一切無いのだ。にも関わらず、真正面から受け止めるその姿は美德とも言えるかもしれないが、それで潰れてしまつては元も子も無い。

「問題は無い　お前はよくやった」
えっ？

「それよりも、たった今要救助者を救出した。どうすれば良い？」
あ、え……わ、わかったわ、すぐに救護班を向かわせるからそれまで待機していて

「了解」

通信が終了し、ヘルメット内の通信機が停止したのを確認したゼ口は、喜びに浸るレプリロイド達へと視線を向けた。
誰も彼もが生きていることを喜んでいる。つい先程まで絶望に囚われていたにも関わらず。

諦めない限り、命に本当の死は訪れないんだ。

「　ッ!？」

不意に、記憶の海の底からその言葉が浮かんできた。まるで、遠い昔に誰かから聞いたような……

か細い記憶の糸を必死に手繰り寄せたが、核心へと至る前にそれは霧散してしまった。これ以上は徒労に終わると判断したゼ口は、頭に添えていた掌を下ろした。

「エックス……?」

救護班が到着したのは、それから暫くしての事だった。

太陽無き蒼穹。無限とも思える空間に一人佇む彼は、己が精神を拡散させていた。腕や手などを越えて際限なく伸ばされた不可視の指は、遙か彼方に広がる空の情景を余すところ無く教えてくれた。吹き抜ける風の音、流れ、そして臭い。周りを取り巻く全てが手に取る様に解る。だからこそ、僅かに生じた揺らぎすらも感じ取る事が出来た。

閉じられていた瞳が見開かれた刹那、彼は両の腕かいなを翻した。掌の中の光刀が、その軌道に沿ってX字状の斬波を飛ばした。蒼色の大気を切り裂いて走る紅の刃は亜音速のスピードで駆け抜けると、果てなく広がる穹の彼方へと消えていった。

その直後、周囲の景色に同化していた『デコイ』の成れの果てがその姿を晒した。

二振りのセイバーを腰部に隠されたウェポンラックへと収納した彼は、緑色の長髪から覗くひどく無感動な瞳で、それを見つめていた。

フフ……相変わらず凄いモンねえ

背後から聞き覚えのある女の声がした。振り返ってみれば案の定、良く見知った顔の立体映像ホログラムが佇んでいた。

「……レヴィアタン、か」彼は抑揚の無い口調でそう言った後、直ぐに眉を顰めた。「何だ？ その格好は」ホログラムの女、レヴィアタンは、衣服の類を一切身に着けていなかったのだ。

眉間に皺を寄せた渋い表情を浮かべた彼は、諫める眼つきで眼前の女を睨んだ。

「フフン……最近缶詰気味のボーヤへのサービス、」
「斬るぞ」

彼は、しまったばかりの腰のセイバーに手を掛けた。くだらん遊びになど付き合う気は無いのだ。

それを見たレヴィアタンが、呆れた様な嘆息と共に「冗談よ」と言ってきた。

「余計なモノを着けてると感知が鈍るのよ。それは貴方も知ってるはずでしょ」

良く見れば、確かにレヴィアタンのウェーブのかかった髪や剥き出しの肌は、水滴を帯びて湿っている。

しかし、彼女の能力上仕方が無いとは言え、そんな格好で人前に出られては、目障りでしかない。

「だとしても、そんなみっともない格好を晒すな。四天王の一人ともあろう者が」

「わかってるわよ、そんなの」

口を尖らせ、そっぽを向いたレヴィアタンは「カタすぎんによ、全く」と漏らした。貴様が適当すぎるんだ、と口中で呟きながら、彼は全く別の言葉を紡ぎ出した。

「ところで、何の用だ？ まさか、本当にそれだけではあるまい」

それを聞いたレヴィアタンが、妖しく笑った。この女がこういう表情をする時は決まって面倒な事が起こる。湧き上がる嫌な予感に辟易しつつも、彼女が話し出すのを待った。「アステファルコンが倒されたわ」

名前に似合わぬ端正な顔に嬌笑を貼り付けたレヴィアタンは、楽しそうにそう言った。

そこまで聞いた彼は、正直拍子抜けしていた。その程度の情報ならば、既にこちらで掴んでいる。勿体ぶって話すものだから何事かと思ったが、わざわざ聞くまでも無かった。返事を返そうと口を開きかけた刹那、眼前の女がその事を承知していないハズが無い事に気付き、急遽全く別の言葉に差し替えた。

「そうか……それで？」

知ってるだろうけど、彼、事あるごとに変な催しを開いていたみたいなのよね

それなら以前聞いた覚えがある。何でも、捕らえたイレギュラーの処刑を見世物にしているらしいが、それ以上詳しい事は把握していない。職務を全うさえしていれば、別に口を出すつもりも無かつ

たし、何より部下の行動をいちいち把握出来る程、器用では無かったのだ。

「で、今回もソレをやってたんだけど、その観客の一人が言ってたわ。『アステファルコンを倒したのは、紅い金髪のレプリロイドだった』って」

「紅……金髪……！？」

その二つの単語を取り込んだ電子頭脳がある一つの名前を弾き出した。が、彼はすぐさま、それを取り消した。あり得ない。“アレ”が目覚めているハズが無い。ましてや、我らに仇成すなど……

おうおう！　なんだか面白そうな事でもりあがってんじゃねえか？　彼らの間に割って入る様に、粗野な男の声が蒼穹の空間に響き渡った。「俺様も混ぜてくれよ、なア？」

レヴィアタンの反対側に出現したのは、ネオ・アルカディア陸軍の略装軍服に身を包んだ男の立体映像だった。彼等に挟まれる形となったハルピュイアは、更に気が重くなった。

「ファーブニル……」

軍服姿の男　ファーブニルが焰の様に逆立った赤髪の下に据えられた貌を無邪気な笑みの形に歪めた。一見すれば、一兵卒にも見えるが、彼もまたネオ・アルカディア四天王に名を連ねる闘将だ。尤も、常時は式典用の軍装を着用している他の四天王と並ぶ光景は、滑稽でしか無いが。

で、一体何の話してたんだよ？

鼻息荒く、ファーブニルが迫る。この男の暑苦しさは相変わらずだ。相手がホログラフだと言う事を、一瞬忘れそうになる。

ボーヤの部下がやられちゃったのよ
レヴィアタンが素っ気無く言った。

振り返ったファーブニルは、彼女の姿を見るや怪しいモノでも見るかの様に眼を細めた。

何てカッコしてんだよ、お前……

……うっさいわね

既視感のあるやり取りを見て彼は嘆息した。時々、彼等が自分と同列である事を失念しそうになる。

オイ！ コイツの言った事は本当なのか！？

「……ああ」

マジかよ！？ ミュートスレプリロイドを倒すなんてなア……レジスタンスもやるじゃねえかよ！

敵の奮闘を喜ぶファープニルの戦闘^{バトルマニア}狂ぶりに、彼は一瞬苦い表情を浮かべたものの、直ぐにいつもの鉄面皮を取り戻し、補足を加えた。

「奴は、我が裂空軍団の中でも下位のハンターだ。いつかは、こうなると想定していた」

ファープニルが「ドライだなあ、オイ」と呟き、背後でレヴィアタンが肩をすくめる気配がした。

四天王直属でありながら、自らを過信し、無様に敗北する者の事など気にかかる必要は無い。

所詮は、その程度だった、と言うだけの話だ。

「当然の話だ……ところで、レヴィアタン。

例の遺跡の方は？」

「冥海軍団^{ウチ}から調査隊を向かわせたわ。流石はドクター・シエル……って、言いたいけど随分荒っぽい方法で最深部の封印を解いてたわよ、彼女」

レヴィアタンの口調が変わった。先程と比べて、まるで別人の様に極めて硬質だった。普段、どんなにふざけていようと、有事の際には指揮官として適切な振る舞いを行える切り替えの早さ、それこそ彼女達がネオ・アルカディアの軍部を預かる四天王と呼ばれる所以の一つであった。

「そうか……それでは？」

「なあ、くんにも。中は見事な位にもぬけの殻。でも、何かあったのは確かだね」

「……どういう事だ？」

「言った通りの意味よ」

レヴィアタンの報告を聞いた彼は、脳裏に浮かんでいた名前が形を成してゆくのを知覚した。レジスタンス共があゝの遺跡を訪れていたと聞いて、まさか、と思ったが、もしも、アステファルコンを倒したの本当に、が自分の知っているレあのプリロイドだとすれば……精神の内奥から頭をもたげる動揺を、出来うる限り押し留めると、無感情な口調でレヴィアタンに命令を下した。

「引き続き調査を続行しろ。新たに何が見つかるかもしれん」「了解」

短く、それでいて明瞭にそう返したレヴィアタン。その直後、彼女のホログラムが蒼穹の空間から消失した。それを見届けた彼は、次にファープニルの方へと振り返った。

「ファープニル。近いうちに、貴様の塵炎軍団の力が必要になるかもしれない。いつそうなつても良い様に備えておけ」

「オウ！ 任せておけ！」

牙を剥き出しにして笑うファープニル。彼がこういう表情を浮かべた時は、決まって精神が昂っている時だ。早く力の捌け口を見つけてやらねば後々面倒になる。

ファープニルのホログラフが消えるのを見届けた彼は、踵を返して歩き出した。二、三步ほど進んだ所で立ち止まり、虚空に指を滑らせる。すると、眼前の空間が矩形に切り取られた。蒼穹の真ん中にぽっかりと開いた穴の奥に広がっているのは、暗灰色の壁面に覆われた通路だ。彼は戸惑う事無く其処を潜った。その瞬間、彼の唇から「……敵が誰であるうと関係ない。俺達は使命を果たす……ただ、それだけだ」と硬質な言う言葉が紡がれた。それは、ネオ・アルカディアの守護者たる四天王の一人 裂空將軍ハルピュイアの矜持と誇りそのものだつた。

直後、周囲の景色が一変し、シミュレーションルーム仮想空間訓練室が、暗灰色の壁面に塗り固められた本来の姿へと戻った。

救出作戦終了から一夜明け、野戦病院さながらの様相を呈していたレジスタンスベースに漸く平穏が訪れつつあった。

メデイカルルームに収容しきれなかった負傷者を運び込んだレクリエーションルームの片隅で、ゼロは未だせわしなく動き回る看護スタッフ達を眺めていた。

救出されたレプリロイド達の中には、衰弱が激しく、未だ予断を許さぬ状態の者も多かった。その為、シエルを始めとした医療スタッフは今も休み無く働き続けている。因みに、ゼロもメンテナンスを受けるように勧められたが、特に異常は感じられなかったので断った。

暫くの間、レクリエーションルームに渦巻く人の流れを眺めていたゼロは、下方から自分を見上げている瞳があることに気付いた。視線を下ろすと、金属とオイルの充満するこの空間におよそ似合わない小さな少女型のレプリロイドの姿が映った。

人間で言えば、八、九才ほどだろうか、シエルと同じハニーブロードの髪を持つ幼い少女型のレプリロイドが、無垢な輝きを孕んだ瞳でこちらを見つめている。

「あなたは誰？」

少女に、ゼロは無表情のまま「……ゼロだ」と答えた。

「ゼロ……もしかして、シエルお姉ちゃんの言ってたゼロ？」

「多分、な」

正直、いい加減だと思ったが、自分でも解らないのだから仕方が無い。それに否定するにしても、そう出来るだけの記憶すら無いのだ。

「そうなんだ……私はアルエット。よろしくね、ゼロ」

眩しいくらい無垢な笑顔を向けるアルエットと名乗る少女は、抱えていた白い猫のぬいぐるみをぐい、と突き出した。「コレはシエルお姉ちゃんが作ってくれたぬいぐるみ。『ブランシュ』って言う

の」

満面の笑みで告げるアルエット。本来は白かったであろうその『ブランシュ』なるぬいぐるみは、様々な汚れが染み付いていてお世辞にも綺麗とは言えない。が、大切にされていたであろうソレの面持ちは、心なしに穏やかなモノに見えた。

こういう時は、気の利いた誉め言葉などを用意しておくモノなのだろうが、生憎とそういう事には疎いゼロは「そうか」としか言えなかった。

「そういえば、ゼロは此処で何をしていたの？」

小首を傾げたアルエットが、そう訊ねてきた。今や病室同然のレクリエーションルームに、医療スタッフでもない者が居る事に疑問を感じたのだろう。彼女の問いに、ゼロは問いで返した。それこそが、彼が此処に來た目的でもあった。

「……一つ、聞いてもいいか？」

レジスタンスベース最下層フロア。その最深部に今は誰も近づこうとしない部屋があった。最低限の照明しか灯されていない空間には、いくつもの黒い袋が並べられていた。その中の一つに、コルボーは辛い痛みを耐えているかのような眼差しを向けていた。並ぶ袋の中に入っているのは、今回の作戦で戦死したレプリロイド達の亡骸だ。

レプリロイドには死者を弔うと言う概念は無い。当然だ。

科学の究極の産物たる彼らは存在自体が理屈の塊なのだから、そんな迷信めいた事を信じるなどありえない。だが、その事実がどうしようもなく悔しかった。

何故、自分はレプリロイドに生まれてしまったのだろうか？　でなければ、彼らを弔う事だつて出来ただろうに。

そう自問してみたが、それは結局、己の傷を抉るだけで、求めた

答えを得ることは出来なかった。

その時だ。この部屋と外の廊下を繋ぐ扉が耳障りな音を立てて開いたのは。

廊下から漏れる光が薄暗い空間に差し込み、闇に慣れていた視覚センサが一瞬麻痺した。ぼやけた視界の向こう側に見覚えのある人影があることに気付いたコルボーは、思い付いた名前を口に出した。
「ゼロ……？」

開け放たれた扉の前に立っていたのは、紅のアーマーを身に纏ったレプリロイド。ゼロだった。彼は無表情を貼り付けたまま安置所に足を踏み入れると、そのままコルボーの横を通り過ぎ、一番奥の列に並ぶ一つの亡骸の前に経った。袋に括りつけられたプレートには『Milan』と刻まれていた。

「……ここで何をしていた？」

ゼロがミランの亡骸を注視したまま訊ねてきた。あっけに取られていたコルボーはその言葉で我に返り、慌てて取り繕った口調で「大した事じゃねえよ」と答えた。「ただ……俺の決意って奴を聞いておいて欲しかったんだよ」

そう。決意だ。いずれバラバラに分解されて生きている者の為の予備パーツとなってしまう前に聞いて欲しかった。今までの戦いを忘れない為に。そして、これからの戦いを生き残る為に。

「そういうアンタは何しにココへ？」

照れ隠しという訳では無いが、なんとなく今の心境を悟られなくなかった。だから、いつまで続くかは自信無いが、出来るだけフラシク口調を装う事に勤めた。

「アルエット、と言ったか　そいつにココの場所を教えてもらった」

アイツ……余計な事を。

レジスタンスのマスコットの存在である少女の無邪気な笑顔を思いだして怒りが込み上げてきたが、彼女に悪気が無い事は解っていたから、それ以上は考えない事にした。

回る思考を強制的に停止したコルボーは、ミランの亡骸を見つめ続けるゼロへと視線を戻した。

「シエルから聞いた。彼とお前は親友同士だったらしいな」

眼差しを揺らす事無く、ゼロが言ってきた。

「どういつもコイツも……」

アルエツトならまだしも、シエルまでもがゼロに余計な事を吹き込んだ事実を知ったコルボーは、今度こそ己の感情をしまいきる事が出来なかった。

確かにミランとは親友同士だった。共に死線をくぐり抜け、何度も絆を確かめ合った。だが、彼は死んだ。『伝説の紅き英雄』を復活させる為に。

電子頭脳が過熱気味だった時ならともかく、今はその事でゼロを恨むつもりは無かった。「彼のおかげで、俺は目覚める事が出来たらしい」

「……みたいだな」

半ば自己嫌悪に陥っていたコルボーは、それを悟られまいと素っ気なく答えた。

「彼 ミランがどういう男だったかは知らない。だが、その命が俺を目覚めさせたのなら……俺はそれに報いなければならぬ」
感情を一切感じさせない平坦な声。しかし、その奥に、何者にも揺るがぬ固い決意が燃えている様に思えた。

「ハハッ……」

思わず笑いが零れた。コイツは最初はなっからそうだった。つまらぬ意地に囚われていた自分とは違って、いつでもシエルの為に戦っていたのだ。

「何言ってるんだよ。そうしてもらわなきゃ困るんだよ。でなきゃ、命懸けでアンタを復活させた意味がねえだろうがよ」

ゼロのすぐ側に歩み寄ったコルボーは、思ったよりも遅しい背中を思い切り叩くと、面を食らった鉄面皮に向けて満面の笑みを向けた。

彼の想いに触れる事の出来たのなら、今からでも遅くは無いハズだ。

「これから宜しく頼むぜ、英雄　　いいや、ゼロ！」

「……ああ」

これから先、自分達を待っているのは、過酷な戦いだろう。その中でたくさん仲間が命を落とすだろう。もしかしたら、己自身がそうなるかもしれない。だが……それでも戦い続ける事を改めて誓った。つまらぬ虚栄心なんかでは無い。

去っていった者達が見た未来。そして、生きている者達の目指す未来の為に。

理由（reason）（後書き）

後書きという名の言い訳

お久し振りでございます。

約半年振りの更新です。

どうにも凝り性なもので、気が付いたら二万字超！？

何がどうしてこうなったんだろうか……

正直なところ、前後編にしようかと思ってたんですが、序盤でそんな事したら、アレとかコレとかはどうするんだ、って事態になるんですよ。ハイ。

取り敢えず、そのところを踏まえて楽しんで頂けたら幸いです。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516o/>

偽書 ロックマンゼロ

2011年6月17日17時10分発行